

がんの既往は心臓血管病のリスクを高める

80%以上の成人がん患者は長期生存する。長期にわたるがんの合併症とその治療が心臓血管病のリスクを上昇させる可能性がある。本研究では、地域住民を対象に、がんと心臓血管イベントの関連について前向き研究を実施し検討した。

大規模前向き研究（Atherosclerosis Risk in Communities Study）の参加者 12,414 例が対象となった。平均年齢 54 歳、女性 55%、黒人 25%であった。中央値 13.6 年の追跡期間中のがん新規発症は 3,250 例（25%）だった。年齢調整後の 1000 人・年あたりの心臓血管病の新規発症は、がんの既往がない人で 12.0 であったが、がんの既往のある人では 23.1 と高かった。心臓血管病の危険因子で調整後の解析では、がんの既往がない人と比べ、がんの既往のある人の心臓血管病、心不全、脳卒中の新規発症リスクは有意に高かった（ハザード比はそれぞれ 1.37、1.52、1.22）が、冠動脈性心疾患については、有意差はみられなかった（ハザード比 1.11）。がんの種類別では、心臓血管病リスク上昇との有意な関連がみられたのは、乳がん、肺がん、大腸がん、血液がん/悪性リンパ腫で、前立腺がんとは関連がみられなかった。

したがって、がんの既往のある人では、がんの既往がない人と比べて心臓血管病の新規発症リスクが有意に高く、とくに心不全で顕著であった。また、がんの既往は、心臓血管病の危険因子とは独立して心臓血管病のリスクを高めることも示された。

出典：Journal of the American College of Cardiology. 2022 Jul 5; 80(1): 22-32.